

序

とても暑い夏が、暖かい冬を予想させましたが、何年かぶりのホワイトクリスマスと、雪の舞うお正月を経験することになりました。冬休みに、この予想できない自然の魅力を改めて感じたのは、私一人ではなかったろうと思います。と同時に、多感な時期から自然界には妙に惹きつけられ大学の専攻を選んだ自分と、それとは似て非なる道を歩んだ自分を重ねながら、若い頃には思ってもみなかった教員人生を振り返るお正月になりました。

大学教育機能開発センターの紀要が2年目を迎えました。センターが開設されてほぼ10年が過ぎる中での第2号です。「今更、紀要なの」という声と「紀要ができて良かったね」という声が、聞こえてきます。私は、紀要刊行が実現できて良かったと思います。センターの教員にとって、研究の発表の場が保証されることは、独善に陥らない最低限の条件だと思います。このまま真っ直ぐに伸びて行って欲しいと思っています。

とはいえ、センターは非常に厳しい状況に立たされています。それは、人文系の新しい学部が構想され、教養教育の核としての地位が与えられようとしているからです。この方針にそって進められれば、センターが担ってきた教養教育の運営が、新学部にとって代わられることになり、センターは授業評価・FD部門が残るとしても大幅な縮小を余儀なくされるからです。昔から、拡大路線は苦勞しがいがあるが、縮小は痛みのみが大きく夢が持てないとよく言われますが、まさしくそれが現実のものとなっています。しかし、長崎大学の長年の悲願を実現するために、歯を食いしばり氣力を充実させる以外に道はありません。そして、センターも従来とは異なる道の模索を始めなければなりません。

センターの現状を見たとき、二つの課題が浮かび上がります。一つはセンターの教職員が努力しているにも係わらず、大学内への発信がうまくいかなかったことです。そして、もう一つは高等教育の理論的な先駆者としての地位が殆ど認められてこなかったということです。前者は、センターが主宰する事業に人が集まらないことに如実に表れています。また、後者は、各学部の教員が授業の進め方等に迷ったときの相談先に選ばれていないことから明らかです。発信がうまくいかないのは、教育で最も重視しなければならない多くの人とのつながりを築いてこなかったからだと思います。この点は素直に反省し、各部局の問題を自分のこととしてとらえ解決案を模索するという努力を続ける以外に道はありません。この過程で小さな接点が大きな面になっていくと期待しています。

高等教育の先駆者、指導者の地位の獲得は、現代的な課題を正面からとらえ、研究することから始まると思います。その研究発表の場が、この紀要なのです。紀要を多くの人に読んでもらい、様々な指摘をいただければしめたものです。その輪が各部局に広がり、紀要を教育改善の共通の場となり、お互いの切磋琢磨が可能になれば、課題は自然と解決されると思います。その意味で、高等教育の問題点を取り上げた論文が多くなることを望んでいます。各先生方の専門の研究発表の場は学会誌に譲り、先生方が教育改革に真剣に取り組まれている姿を本紀要に示し、改革議論のきっかけができればと思います。

2011年3月

大学教育機能開発センター長 橋本健夫